

1. 基本情報

区分	河川	担当者名	松永 武
タイトル (英文)	^{137}Cs and ^{90}Sr in water and suspended particulate matter of the Dnieper River-Reservoirs System (Ukraine)		
タイトル (和文)	ドニエプル川水系に（ウクライナ）における水中と懸濁粒子中のセシウム 137 ならびにストロンチウム 90		
キーワード	annual discharge, Dnieper River, river water, suspended particulate matter, ^{137}Cs , ^{90}Sr		
著者	Sansone, U., Bellia, M., Voitsekovitch, O.V., Kanivets V.V.		
文献	Science of the Total Environment 186 (1996) 257-271		

(1) 対象地域

チェルノブイリ事故地域の河川（プリピャチ川）から、約 500km 下流の黒海までの経路。

(2) 重要な図表

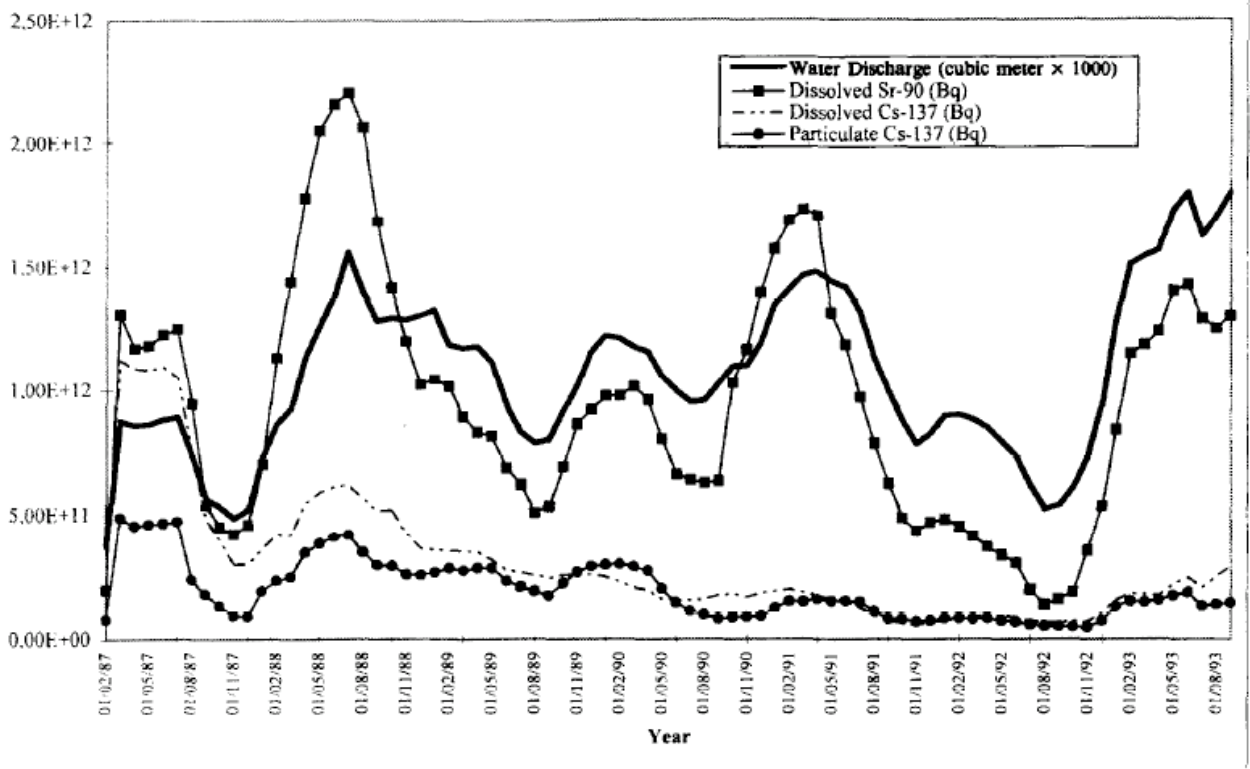


Fig. 3. Patterns of ^{137}Cs and ^{90}Sr and annual water discharge in the Pripyat river from 1987 to 1993. Experimental data were smoothed using a moving average procedure.

2. 提言につながる情報

(1) モニタリングへの活用

定期的・長期的モニタリングの成果が現れた報告であり、モニタリングの重要性が認識できる。

(2) 流出挙動・経路

Sr-90 の河川水中濃度は出水時の濃度増加が明確で流量との対応が強い。一方 Cs-137 では、流量との対応は弱い。また、Cs-137 は途中の人造湖での堆積物への沈降移行が顕著。

(3) 除染の際の留意点

内部被ばく、外部被ばくを含めた被ばく経路解析の下で、対策の優先度を考える必要がある。

(4) 担当者のコメント

チェルノブイリ事故で汚染を受けた近傍河川は、下流の首都キエフの水源であり、沿線の灌漑・内水漁業にも深く関わっている。福島事故と比較したとき、自然条件の違いによる挙動の違いのみならず、(むしろ出発点として) 社会条件の共通点・相違点に着目して被ばく経路・被ばく線量の考察を行うべきである。